コモンウェルスの文学

平野敬一・土屋　哲　編

28 研究社選書

コモンウェルスの文学

昭和 58 年 7 月 20 日　初版発行

定価　980 円

KENKYUSHA

〈検印省略〉

編　　者　平野敬一
　　土屋哲

発 行 者　植田虎雄

印 刷 所　研究社印刷株式会社

発行所　研究社出版株式会社　〒101　東京都千代田区神田駿河台 2-9
電話（編集）03-291-1416
（営業）03-291-0951

Printed in Japan　© 平野敬一、他

ISBN 4-327-34228-9 C1298 ¥980E

研究社選書
28

コモンウェルスの文学

佩一・土屋 哲 編

目

次

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

コモンウェルス文学の歴史と現況……土屋哲…7

1　カナダ

カナダ文学の背景……平野敬一…14

付1　カナダ文学のアイデンティティ／付2　カナダ的想像力の問題

カナダ文学開眼……佐伯彰一…51

2　オーストラリア、ニュージーランド

オーストラリア、ニュージーランド文学小史……クリス・ティフィン…80

オーストラリア文芸思潮の流れと現況……越智道雄…111

3　アフリカ

アフリカ文学小史……ジョフリー・ヘアスネイプ…134

アフリカ文学の特質と展望……土屋哲……155

4　インド

インドの現代英語小説……山本恒……176

5　西インド諸島

カリブ海・西インドの文学……土屋哲……194

コモンウェルス文学について……平野敬一……209

コモンウェルス文学の歴史と現況

土屋　哲

コモンウェルス(英語圏)文学とは、かつてイギリスの自治領、もしくは植民地であった土地で、第二次世界大戦後、続々と完全独立を達成した国ぐに、即ちオーストラリア、カナダ、ニュージーランド、インド、パキスタン、スリランカ、マレイシア、シンガポール、アフリカ、西インド諸島カリブ海域の国ぐにの文学である。これらの国ぐにでは今でも英語が、公用語もしくは準公用語として使用されており、ところによってはピジン・イングリッシュ Pidgin English とか、クリオール・イングリッシュ Creole English といった特異な英語を発達させている。そして世界中に散在するこれら多様な地域の文学にほぼ共通していえることは、これらの地域は長らく大英帝国の支配下にあっただけに、喪失した、あるいは喪失を強いられた自己のアイデンティティを、ルーツを探り、さらには自らのアイデンティティを新しい環境の中で再創造しようとする傾向、つまり独立とともに目覚めた主体性を、独立後の新たな情況の中でどのように構築していくかという問題が、それらの文学の主なテーマとなっている点である。

ところで英語およびイギリス文学は、中世から近代への変わり目に、即ちチョーサーとシェイクスピアの頃に、大きな変動を経験した。そして以後ヨーロッパに、個人主義を信条とする近代文学の花が、豪華絢爛と咲き誇るのであるが、さしものこの近代文学も一九世紀末をもって、どうやら閉幕したことを立証する数多くの兆候が最近、顕著に現われるようになってきている。英文学に例をとれば、ジョーゼフ・コンラッド、E・M・フォースター、D・H・ロレンス、ジョイス・ケアリ、イーヴリン・ウォー、グレアム・グリーンなど、二〇世紀を代表する一流作家の作品の舞台が、イギリス本土を離れ、インド、アフリカ、中南米など第三世界に数多く設定されている事実がその一つである。まるでイギリスを舞台にしてはもはや小説(近代文学の中心ジャンルを形成してきた小説)が成り立たないとでもいいたげな、この舞台設定のヨーロッパ離れ現象は、当然のように、第三世界土着の作家の抬頭を促がすことになる。例えば当初医学を志していたナイジェリアの作家チヌア・アチェベの文学開眼の動機が実は、イバダン大学在学中にジョイス・ケアリの『ミスター・ジョンソン』(一九三九)を読んで、この作者にはアフリカ人の内面が全然解っていないのに気付き、ナイジェリア人の誰かが内部から書き直さなくてはならないと、痛感したことだという事例からもうかがい知ることができるように、いやしくもアフリカを舞台に小説を書く限り、アフリカ土着の作家に敵すべくもないのである。それにD・デイシズが『小説と現代世界』(一九六〇)の中で「昔のイギリスには、す

べての人が共有する原理というものがあった。したがってイギリスの小説家は、その原理に基づいて、登場人物のさまざまな行動の中から、重要なものだけを選択できた。ところが現在では、その共有の原理が喪失し、したがって重要なものは存在しなくなり、当然、選択の余地はない」といっているように、この共有の原理の喪失は、市民社会を支えてきた価値規準の崩壊を意味し、さらにいえばプロテスタンティズムの(個人主義的)倫理の解体を示すともいえる。その意味でも、ヨーロッパ二〇世紀文学作品の中から過度の〈破壊的要素〉を析出したスティーヴン・スペンダーの作業およびプルーストやD・H・ロレンスの作品に破壊的イメージの横溢しているのを見てとり、むしろ健全な創造的イメージは、「いまだ未熟ながらアフリカの現代小説に数多く存在している」と指摘するナディン・ゴーディマの託宣は、ヨーロッパ近代文学の終焉を告げる弔鐘とも受けとれる。ヨーロッパ二〇世紀文学に破壊的要素・破壊的イメージが支配するのも当然であり、むしろこれからの新しい文学の可能性は、ゴーディマも鋭く嗅ぎわけているように、アフリカを含むコモンウェルスの文学から開けてくるともいえる。

それではこのコモンウェルスの、瑞々しい、限りない可能性を秘めた〈新しい、未来の文学〉は、どのような曲折を経て現在世界に定着し、今日の発達を見るに至ったのだろうか。

まず大学で最初に講座が開設されたのは一九四二年で、ペンシルヴェニア州立大学のA・ブルース・サザランド教授が英文科の中に、"The Literature of the British Dominions and

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

Colonies”というコースを設置したのがそのはじまりである。内容は、カナダ、オーストラリア、南アフリカの白人文学で、これらの地域から、従来の英米文学の枠をはみ出た、しかも英米の作家たちを凌駕する、すぐれた白人作家が輩出してきたからである。そしてアジア、アフリカに続々と独立国が誕生する一九六〇年前後の、国際秩序が再編制される過程で、コモンウェルスという概念構図自体に大きな質的変化が生じた。政治面では一九六二年にロンドンのホーランド・パークの近くに偉容を誇る Commonwealth Institute が創設され、かつての支配者—被支配者というタテの関係に代わってヨコの共同体的連帯を重視し、その強化をはかることを主目的とするコモンウェルス会議を一年置きに、会場は傘下の各国輪番で開くようになった。(フランス語圏でもコモンウェルスの構想が存在し、この数年来その強化が目立ち、英語圏、フランス語圏各コモンウェルスをめぐる英仏間の勢力争いも最近、激化している。)この動きに連動するかのように文学の面でも一九六四年に“Unity and Diversity in a Common Culture”というテーマで、コモンウェルス文学会議がイギリスのリーズ大学で開かれた。

そしてこの会議が口火となって今日の、コモンウェルス文学の定着と隆盛をみるようになるのである。即ちこの会議の成功に力を得た学者・作家たちは直ちに研究団体「コモンウェルス文学言語研究学会」Association of Commonwealth Literature and Language Studies (略称 ACLALS) を設立、リーズ大学を本拠として一九六五年からは機関誌『コモンウェルス文

学ジャーナル』を発刊、一九六八年からは二年置きに国際会議を開いている。第一回はオーストラリア（一九六八年）、第二回がジャマイカ（一九七一年）、第三回はデンマーク（一九七四年）、第四回がインド（一九七七年）、第五回はフィジー（一九八〇年）でそれぞれ開かれ、年を追ってますます活況を見せている。（第六回は一九八三年にカナダで開かれる予定。）当然のようにコモンウェルスの講座が、リーズ大学、ケント大学、サセックス大学、エジンバラ大学などを皮切りに、世界の多くの大学でもたれるようになり、交換教授・留学などを通して文化交流が活発に行なわれるようになってきている。そしてこのようなコモンウェルス圏の文学と言語研究の活性化と多様化、組織の飛躍的な拡大に伴って、現在では組織の整備と系列化が着々と進行し、すでにたとえばヨーロッパ支部、南太平洋支部、カナダ支部、インド支部といった具合に各ブロック別に支部が設置され、各支部がまたそれぞれの機関誌をもつに至っている。（本部は、輪番制の国際会議を主催する支部が兼ねることになっている。）

ひるがえって日本の場合、このような世界の趨勢に触発されて、コモンウェルス文学に対する関心は近年とみに、特に若い研究者層の間で、中でも中学・高校の先生方の間で高まっていると聞く。既成の日本の英米文学研究の権威主義・事大主義からくる閉塞状態に失望して、かつては英米文学ももっていた自由で奔放な、瑞々しい活力に強く魅かれてのことだろうか。

そして実地面でもコモンウェルスの文学が日本の風土に着実に根付いてきている兆候が最近

顕著である。たとえばアングロ・インド文学、インド、パキスタン、東南アジアの英語文学、英系カナダ文学、オーストラリアとニュージーランドの文学、南アフリカ文学に多大のページを割いている『ケンブリッジ版イギリス文学史』が研究社から出版されたことがそれである。また「研究社小英文双書」では、すでに現代アフリカ短編集6巻、現代カリブ短編集、現代オーストラリア短編集3巻が出ており、インド、カナダ、ニュージーランド短編集も続刊の予定ときいている。さらに英和辞書類でもカナダ英語、オーストラリア英語などコモンウェルス圏英語が数多く採択され、百科事典はすべて、コモンウェルスの作家を網羅するようになり、研究面でも一九七九年の日本英文学会第五一回大会で、わが国では初めて、「コモンウェルス(英語圏)の現代文学」という題のシンポジウムがもたれた。それに近刊の『英文科学生必携ハンドブック』(研究社版)ではコモンウェルス文学が堂々と、イギリス文学、アメリカ文学と肩を並べて、英文科学生必読の分野に仲間入りを果たし、やがて日本の大学英文科のカリキュラムにコモンウェルス文学が加えられるのに、一〇年を必要としないと私は見ている。つまりかつて三〇年(一世代)前にアメリカ文学が、日本の大学の英文科に果たし、またそれ以後の日本の英文学界に果たしてきた役割をいまコモンウェルス文学が果たそうとしているのである。そして現に青山学院女子短期大学では英文学科カリキュラムを大幅に改正し英語圏文学、英語圏の文化と社会という講座を新設、八三年四月からの実施に踏み切りこの道に先鞭をつけた。

1

カナダ

カナダ文学の背景

平野敬一

あの強力な存在感、実体感をもつ隣国のアメリカに比べると、カナダという国は、いつまで経っても、どことなく影が薄く、実体感に乏しいように思われる。それは多分に国の発足の事情によるものであろう。

一八六七年のコンフェデレーション(諸州連合)により、現在のオンタリオ州(上カナダ)とケベック州(下カナダ)とを合わせたカナダ州に、大西洋岸のノーヴァ・スコーシアとニュー・ブランズウィックの二州が加わったというのが、発足時のコンフェデレーション、すなわちカナダ国の姿だった。今日のカナダを形成しているあとの諸州は、一八七〇年から、今世紀にかけて、順次、必ずしも速いといえないテンポで加わり、一九四九年のニューファンドランド州の加入をもって一応、現在のカナダ国の版図が確定したのである。この経過をみても分かるよう

に、カナダは革命や独立戦争などによって一挙に形成された国ではなく、各州間の駈け引き、妥協、損得計算などの迂余曲折を経て、ようやく、ちょうど積み木細工を積み重ねるようにして、出来上がった国なのである。コンフェデレーションに加わることに決めた州も、カナダという名の連合体に、特別の帰属意識や親近感をもっていたわけではない。各州のカナダ国への加入の中に、本土復帰的な悲願や憧憬を読みとったら、見当違いも甚だしいことになろう。事情はもっと散文的だった。当初から加わったノーヴァ・スコーシア州の場合、カナダ国の一員になってから一世紀以上は経っているわけだが、それでも「カナダ」というのは、セント・ローレンス川の向こうのよその地、という意識がノーヴァ・スコーシア人から完全に消えていない、といわれている。第二次大戦後にようやく加わったニューファンドランドになると、地理的にも辺陬(へんすう)の位置にあるせいか、ニューファンドランドとカナダが、なかなか意識の中で結びつかない。カナダは依然として、よそなのである。一九七九年に筆者はニューファンドランドで一夏すごしたが、現地紙の投書欄に登場する“those foreigners from Canada”(本土のカナダ人を指す)という奇妙な表現にめんくらったことを覚えている。カナダ人とは自分たちのことだ、という意識がこの島の人たちの身につくのは、まだまだ先のことのように思われた。

ということはつまり、アメリカならおそらくテキサス州人もマサチューセッツ州人ももっているに違いない強固なアメリカ人意識に比べると、カナダ人意識は、なんとも実体が稀薄なの

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo